石川淳選集

第八卷

石川淳選集　第8巻（全17巻）

1980年6月6日　第1刷発行©

¥1500

著　者　石川淳（いしかわじゅん）

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

至福千年

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小說

八

至福千年

一

まづ水。その性のよしあしはてきめんに仕事にひびく。江戸府内のことにして、谷中三崎か淺草堀田原あたりの水ならば京の水にもめつたにおとらない。この淺草堀田原といふところは藏前八幡の裏手にあたつて、北よりに馬場、南よりに御藏小揚組屋敷を控へた一筋道、道のほとりに町家があり、中に一軒、しもたやのやうに見える格子の戸ぐちに木彫の面を掲げたのが目じるしになつた。面はどんぐりまなこの、鷲鼻たかく、あごを四角に張つて、髪の毛の渦を卷いたのはどうやら南蠻くさいつらがまへとおもはれたが、ひとは外道の面と呼んだ。ここが東井源左の住居でもあり仕事場でもある。なに、號なんぞはいはなくても、ただ更源で通る。仕事はすなはち更紗をゑがくことであつた。

更紗をゑがくにはとくに師傳の據るべきものがなく、めいめいの工夫に俟つところが多い。意匠はこころまかせである。さういつても、技の精妙に至らうとすれば、金巾下地の仕様からはじめて、眞の生澁の取り方、藍蠟、雌黄、生臙脂の解き方、草色、茶色、紺、紫の使ひ方、繪具留の仕方、仕上の洗ひ方、黑地のあつかひ、白の染抜、吹繪、金更紗、銀更紗と、おのづから法がさだまつて、師は古きにあり、これを破らうとしても規矩は越えがたい。また品類をいへば、唐、朝鮮、シャム、天竺、ジャガタラ、安南、オランダそのほか産地の風にしたがつて、人物、鳥獸、花卉、草木、さまざまの手にわかれる。中について、源左は黑船渡の人形手の法をまなんで妙をきはめた。その製するところの更紗を吉野紙に包んで焚く火の上に張つておくと、

自然とくすぶつて、ふるびが附く。これを古渡の更紗とくらべるにちとの遜色もない。利を見るにさとい商人はこの源左の製品を買ひとつて、正眞の古渡と稱して高値に賣りさばく。そのことがいつかうはさに洩れて、おなじ更紗繪かきの仲間のかげぐちに、あいつもだいぶ格が落ちたな、マガヒモノをつくつてゐるさうな。それがまた當人の耳にはひると、源左はいきどほつて、以後堅くふるびを附けることをきらつて、五彩あざやかな眞あたらしいままの布のはしに、わざと金糸で東井と縫ひつけた。しかし、商人にはききめがない。金糸の銘はそこだけ切りとることができる。いや、切りとるまでもなく、しひてふるびを附けるにもおよばず、更源苦心の新柄と知れると、銘入はかへつて一時の好みにかなひ、ひとのよろこぶところとなつて、おもひのほかの高値を呼んだ。どつちにころんでも損はない。たくまずして損にならないはうに向いてしまふといふ運勢が源左にめぐまれてゐるやうであつた。

仕事場には損得をはじく十露盤は置いてない。井戸はこんこんと吹きあげてつい柄杓で汲めるほどなのに、別に京から取寄せた加茂川の水を澁の出ない古い樽に入れて据ゑてある。夏は一夜冬は一日一夜水に浸けた大豆を摺りつぶして木綿の袋でよく絞つたのを、極上の金巾の表から一遍引いて干し、裏から二遍引いて干し、下地の加減よしと見て、猪の牙で表をならして繪筆をとる。燈明のあかるい神棚の下に、四十がらみの、きかぬ氣らしい男がひとり、わき目もふらず布にむかふ。まつたく、この一月あまりといふもの、源左はそこにこもつたきり、願掛でもしたかのやうに、好む酒も絶つて、一足も外に出ることなく、いつもは弟子にも手つだはせるのに、このたびの仕事にかぎつて、ただ三度の食を闕ぎはまではこばせるだけで、中をのぞくことさへ許さなかつた。さて、やうやく繪ができあ

がつて、かさねて念入に補筆したうへで、仕上の手順くるひなく、生澁を沸かして引き、天日に干し、さらに盥の水に洗つて艶を出し澁をおとして、さつと絞つた布の、表のはうを下に塗板に張りつけて、それがきれいに乾いたけさ、源左はとたんに足の痛みをおぼえた。めつきり寒くなつたきのふけふ、とりわけ朝の冷込に、持病の痛風がおこつたものと知れた。

この家には女きれは無い。めしの支度はといへば、ついちかくに繩のれんの店があつて、源左はよくそこに行く。外に出ないときのために、臺所に酒は缺かさない。また土釜のめしぐらゐは弟子が焚く。弟子といつてもたつたひとり、十六歳のまだこどもつぽいのを、源左は棒でひつぱたくやうにして小氣味よくこきつかつた。掃除、雑巾がけ、格子みがき、仕事場の跡かたづけ。そのうへ、みいりはわるくないはずでも、右から左にまきちらす内幕だから、ときには家に金氣(かなけ)の切れることもある。質屋の使、借金取のあしらひまで一手に押しつけられながら、しかしよくそれに堪へて、頬のつやつやしたこの弟子はついぞ物にめげるのいちけるのといふことを知らなかつた。

「おい、與次郎。」

名をよばれて、弟子は臺所から立つた。源左はすでに茶の間にゐて、いつのまに著かへたのか、市樂の羽織に茶の獻上の帶といふよそゆきのいでたちで、膝もとにひろげた唐草の風呂敷になにかを包みかけてゐた。その風呂敷からもれて、光るまでにうつくしい布のはしがちらりと與次郎の目を打つた。できあがつたばかりの更紗にちがひない。さう見るひまもなく、包はきゆつと結ばれた。中結への紐が封印のやうであつた。いつもならば新案の意匠は弟子にも示されるのが例である。またちらりと見たかぎりでは、どうも人形手のやうではない。みごとな色合ながら、模様はおそらく

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

尋常のアラレ手ではないか。世におこなはれてゐる意匠の品を作るのに、名人ともよばれるこの親方が一月あまりも、いはば精進潔齋、酒まで絶つひとだらうか。不審であつた。しかし、それを口には出さずに、

「御用は。」

「駕籠のあるところまで、ついて來てくれ。」

立ちかけて、うむと、源左は顔をしかめて足をおさへた。

「お痛みですか、親方。」

「なあに。」

「小舟町さんでしたら、わたくしがまゐりませう。」

日本橋小舟町の丸庄は更紗問屋である。與次郎が使に立つことはめづらしくなかつた。源左は返事をしない。びつこをひきながら、杖をついて戸ぐちを出た。

「包はわたくしが持ちます。」

「氣をつけろよ。」

きびしい聲にきこえた。

「え。」

「ガエンが多いからな。」

ちかくの小揚組屋敷には藏米をあつかふ人足が出入する。こいつら、女にはふざける、いひがかりはつける、氣が荒く、がらがわるい。町ではこれをにくんでガエンといつた。しかし、それならば日常のことである。今さらなにに氣をつけるのか。與次郎はだまつて包をしつかり脇に抱へた。

藏前八幡の境内を抜けて、表通へと、源左はさきに立つた。朝が早いので、まだひと影はちらつかない。空は晴れてゐたが、風はつめたく、大銀杏の枯葉が宙に舞つた。

「上のはうはお代替りといふが、下のはうはあひかはらずからつ風だ。」

安政五年戊午、七月將軍家定沒、十月家茂就職、大

老は四月から引きつづき井伊直弼といふ仕掛は「下のはう」にとつてどうといふこともない。さきをととし以來、地震コロリ志士の探索と、黒船の來たのにかさなつて世の中さわがしく、やがてことしも暮れようとする十一月の末であつた。

うしろから落葉を踏んでちかづく足音がする。それがこちらを追ひ越しかけて、

「おはよう。」

みしらぬ若い男である。縞のきものをきちんと著て、どこかの店の手代のやうに見えた。ただの挨拶だらう。とたんに、男はさつと手をのばして、あはや與次郎の抱へた包をつかまうとした。

「あ。」

あやふくその手を振りきつて、包は離さず、與次郎は身がるに飛びのいたが、土にすべつてたふれた。

「こいつ。」

源左の振りおろす杖の下をくぐつて、男はなほも執念ぶかく迫らうとする。めくら滅法の杖に業はないが、力はなかなかつよい。男は匕首を抜いた。これはむしろ逆におのれの身をまもるためのやうであつた。そこに、おきあがつた與次郎があたまを低く、敵の胸をねらつて、だつと突つかかつた。まだ前髪のこどもとあなどつて、これほどむちやな藝があらうとはおもひがけなかつたのだらう。男はよろけながら、器用に身を引いて、足はやく逃げて行つた。

「なんだい、あいつは。」

さういふ與次郎を見て、

「お。おまへ、やられたな。」

手の甲に血がながれてゐた。白刃のきつさきがそこを掠めたにちがひない。與次郎は音をあげなかつた。

「そんな傷は猫にでも嘗めさせればすぐなをる。しつかりしろ。」

それでも、源左はふところの手拭を裂いて傷ぐちに巻きつけてやりながら、まだ片手から離さない包を見ると、

「まぬけ。風呂敷に血を飛ばしたな。だから氣をつけろといつたんだ。ばかめ。」

邪慳に包をひつたくつて、

「おまへのやうな腑拔はつれてあるけない。さつさとかへれ。」

「親方は。」

「餘計な世話をやくな。おれひとりで行く。とんだひようきんものが出てくれたおかげで、足の痛みがとまつたやうだ。」

「だいぢよぶですか。」

「ふざけるな。天王橋まで行かないうちに、なじみの駕籠屋がある。おまへなんぞをあてにするか。」

ことさらに杖を振つてあるいて行くあとから、しかし與次郎は追ひかけて八幡門前の表通に出た。剛情なうしろすがたはかなたにすたすた遠ざかつて行つた。

「ジロさん、どうしたのよ。朝つぱらからぼんやりして。」

ふりむくと、二十五ばかりの女の、濡手拭に七つ道具はおきぬけの朝湯のかへりと知れて、いやらしいまでにいろつぽく、茹でたやうにほつたのが繪にかいた浮氣の相といふ見立になつた。ついむかうの黒船町に住む遊藝師匠、清元節とはとなへてゐるがじつは何節ともつかず、端唄大津繪のたぐひまでたつしやにこなすのが重寶がられて、これが延登喜さんと呼ばれてゐるのはおそらく町内で勝手につけた藝名であつた。

「あら、手をどうかしたの。血がにじんで……」

「ころんでけがしたんです。」

「手拭がまつかぢやないの。そんなこつちやだめよ。親方は。ああ、お出かけ。それぢやうちにいらつしや

い。膏藥ぐらゐはありますよ。」
　與次郎はもともとこの女を好まなかつた。しかし、傷の手當のためにもせよ、さそひのことばにひきずられて行つたのはこの好まない女にもひそかに惹かれるものがなかつたとはいへなかつた。
　あがりくちの二疊から唐紙一重むかうが茶の間で、その唐紙をあけたとき、與次郎はおやと闊ぎはに膝を突いた。
「宗匠。」
　三味線のかかつた壁を背にして、三十を一つ二つ越えたか、髯の剃りあとのあをあをとしたのが、女物の、てつきり延登喜の袢纏をひつかけて、長火鉢の銅壺に德利の加減を見てゐる風態はとんと宗匠らしくなかつたが、今戸河岸の一字庵冬峨、俳諧師と稱して、日ごろ更源とはしたしい附合のものである。
「與次郎か。こつちへはひれ。遠慮はいらねえ。きのふそこの榧寺に法事があつてな、かへりにここに寄つたのが運のつきで、朝まで枕があがらねえといふ御重態よ。」
　法事のかへりがどうしてここなのか、問ふべからざることのやうであつた。
「どうだ、おめえもひとくちのむか。」
　延登喜がくすりのごたごたはひつた箱を取り出して來て、
「いいえ、ジロさんはころんでけがを……」
「なに。もうこどもともいへねえのに、とぼけた眞似をするなよ。見せろ。もつとそばに寄れ。」
　ひとめ見ると、その目が光つた。
「これはいけねえ。おとき、たしか燒酎がすこしのこつてたな。いつか梅を浸けたやつの。小桶もいつしよに。」
　手ぎはよく燒酎で洗つて、膏藥の上からあたらしい

布をしつかり卷きつけた。

「おい、與次郎。なにかわけがあるな。おれも以前は二本ざしのはしくれだ。鐵砲傷か槍傷か見わけがつかねえとおもふか。どうしたんだ。いつてみろ。」

與次郎はなんといはれてもだまつたままで押し通した。

「いはねえのか。はつは、いひたくねえのかい。さうか。それぢや聞かねえ。」

口のきき方が傳法なのは醉つてゐるせゐばかりではないだらう。この俳諧師、ときどきは冠附とか三笠附とかいふバクチまがひの興行をぶつて小づかひをかせぐくちであつた。

「ときに、おめえの師匠、いや、親方は……ふむ、留守か。あとでちよつと顏を出さうとおもつてたが、東井さん留守ぢや仕様がねえ。」

師匠の先生のといふやつは虫がすかねえ。おれは更紗の職人だ。さういふ更源にしても、東井の號はもと俳諧の癖から出た。冬峨はふつとのみかけの猪口を置いて考へこむ目つきになつた。

「待てよ。このところ、東井さんとはずつと逢はねえ。なんでも大事な仕事に凝つて一あしも外に出ねえといふうはさは聞いた。それが留守とは、外に出たとは、つまり仕事ができあがつたといふことか。をりもをりに、おめえのその傷……ふーむ、こいつは判じものだ。」

じろりと與次郎の顏を見ると、この小僧、もう傷のことは氣にとめぬらしく、かしこまるでもなくて、出されたあつい番茶をのほほんとすすつてゐたが、もしかすると逆にこちらのはうが顏色を讀まれることになりさうなけはひであつた。

「はつは、考へてみてもつまらねえ。とんだ疝氣筋だ。この將棋、詰があるかどうか。それよりも酒のこと

だ。」
また猪口をとり直して、つぶやいた文句が、
隙間風思案のはてが酒に落ち
冬峨はひとりで笑つて、
「いけねえ。これぢや冠附のできそこなひぢやねえか。わるい癖がついた。朱にまじはればだよ。一字庵の風雅も脈があがつたやうだ。」
それでも、性こりもなくすぐつづけて、
火だねを吹いてあぶる新海苔
德利を振つてみて、
「あ、酒もきれた。いよいよ世話場だ。」
延登喜がそばから、
「はばかりさま。しがない渡世ですみませんでしたねえ。」
「なげくな、なげくな。無いと見せて、あるものはある。」
「さうおもつて四方に聲をかけておきました。」
臺所でかたこと音のするのは小女がなにか支度をしてゐるのだらう。
「ついでにあの子に一走り魚屋をのぞいて來てもらはうか。もう朝河岸が著いたころあひだ。」
延登喜が膳ごしらへにかかつたのをしほに、與次郎は席をすべつて、
「お世話になりました。おいとまいたします。」
「まあいいぢやありませんか、ジロさん。ゆつくりしていらつしやいよ。お酒の相手が迷惑なら、繪本でも見て……」
「おい。繪本もいいが英泉ゑがくなんぞはこどもに毒だぜ。罪つくりな眞似をするな。」
冬峨はふところから菖蒲革の財布を拔き出して、
「與次郎。これはほんのすこしだが、歳暮のしるしだ。遠慮なく受取つておいてくれ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com